第 42 回歴史探訪は京街道から枚方宿散策で当日は天気に恵まれ寒さもそれほどでなく気持ち良い探訪日和でした。参加者 19 名　　案内人は郷土史家入野清先生

世話人　　たがかけ　利夫

1・御殿山神社　枚方市御最山町

御殿山神社

御殿山神社絵馬

京阪御殿山駅の東側の道を北へ 200m 程いくと這が変則的な丁字路になり、その北面に「渚院跡」の寮内がある。その手前の路地を廣へ 150m 程途中石段を登っていくとこの神社の裏側出る。案内によると、古代からこの辺一帯は「交野ケ原」と呼ばれ、渡来系の人が早くから住み、優れた農耕技術と共に高い文化をもたらした地域であった。また山、川等の環境から牧場が発達した景勝の地でもあった。平安時代になると近くに「渚院」と呼ばれた惟喬親王の離宮があったことで、当時の上級貴族達が集い、いろいろな行事をしたので華やいだ場所でもあった。「渚院」が衰微した後は、その跡地に観音寺が出来、その中に小倉の粟倉神社枚（枚方市小倉町）の御旅所があるだけで本格的な神社がなかった。元和 2 年（1615）小倉村が杜殿を造営し、八幡大神を勧請して八幡宮として小倉、渚両村の産土神として仰いできた、文政（1818～29）に渚村に産土神勧請の議が起こり、前記御緑所に八幡大神を勧請して産土神と斎祀り西粟倉神社と称した。

明治 2 年（1869）神仏分離令により、御鞍山に新たに社殿を造営し、同 3 年 9 月 19 日御殿山神社と改称した。

2・渚院坊　同市落本町

御殿山神社から来た道を 300m 程北へ住宅の中を渚幼稚園へ目指していくと小公園がありその南側に写真の碑がある。
「渚院」は惟喬親王（844～971）の離宮であるが、親王は文徳天皇と紀の豪族紀名虎の娘静子（紀有常の妹）とに生まれた第一皇子であったから次期天皇への道皇太子
になる人であった。しかし、後に妃として入った太政大臣藤原良房の娘明子が生んだ第四皇子惟仁親王（後の清和天皇）が皇太子に選ばれた。
当時の政局は、藤常北家が他の藤原家を抑えて藤原房前（北家の祖）の流れを継ぐ良房は朝廷を取り込み他の派閥を圧倒していた。紀家は、あらゆる手段を尽くして惟喬親王を守り立てたが藤原家のもつ勢力分布力の及ぶところではなかった
　皇太子争いに敗れた惟喬親王は、山崎の水無瀬や交野の渚に離宮を営み在原業平や紀有常らと遊猟や作歌、饗宴に憂さを晴らしたという。
この時、業平が親王の事を歌ったといわれる有名な歌がのこされている。
　世の中に　たえて桜の　なかりせば　春の心は　のどけからまし　在原業平
その後親王は太宰権帥・弾正尹・上野守などを歴任した後、貞観 14 年（872）に 29 歳で出家し、洛北比叡山麓小野に隠棲し、寛平 9 年（８９７）54 歳で亡くなられた。
「渚院跡」は場所としては狭い所であるが貴重な史跡が残されている。
渚院跡の中ほどに上記の碑がある。寛文元年（1661）11 月に建てられたものであるが、風化が激しく読み取ることは殆ど困難であるが、2002 年、旧「枚方市史」、「大阪府全史」、「殿山第一小学校 100 年史」、「交野郡奈疑佐院碑銘」（明治 15 年写し）、「御殿山神社板書」など複数の資料から推定され、平成の石碑と翻刻されたのが右の写真である。それによるとあらまし次のようである。
碑には、渚の地がすばらしい土地であること、渚院を含む交野ケ原が平安・鎌倉貴族の歌心を刺激して、多くの文学作品を生み出したこと、寛文年間（1661～73）当地渚村を支配した永井伊賀守尚庸が、荒廃した渚院跡に桜を植えるなどして復興に尽くしたこと、その功績を残す為江戸初期の儒者林羅山の三男林鵞峰（1618～80）に碑銘の撰を託したことが漢文で記されている。碑文の終わりには次の様にまとめている。

　　ああ波瀲(なぎさ)よ　境は王畿に近し
　　翠華は雲の如く靡き　白桜は雪のごとく飛ぶ
　　吟ずれば以て酔が勧み　遊びて帰るを忘る
　　在昔は盛んなれど　中葉は式微す
　　烟は野水を籠み　月は村扉を鎖す

　所々見慣れない辛が出てくるので分かりにくいが、要約すると次のようである。
花に良い匂いを出させること、白桜を育て花を雪のように飛ばすことは、先人の意気に応える事であり渚院跡の意義を後世に永く伝えるよすがとなるはずである。
「渚院址」には、この他にもいくつかの史跡がある。

渚院の碑

復刻碑

●鐘楼と梵鐘

渚院の鐘楼

史跡の中ほどに写真の鐘楼と梵鐘がある。渚院は推喬親王らがこの地を去った後衰微し、江戸中期に当地の支配者永井伊賀守によって一時復興したが、その後また荒廃して跡地には真言宗観音寺が建てられた。本尊に十一面観音を祀り、隆盛を取り戻したが明治 2 年の神仏分離令により、同３年に廃寺になり、同２２年に十一面観音は西運寺に、翌年本堂は禁野和田寺に移築された。鐘楼と梵鐘が唯一観音寺の物として残された。

琵鐘は、枚方上之町の田中家が寛政 8 年（1796）に鋳造し、寄贈したもので平戎８年４月に枚方市指定文化財になった

●渚院址と「土佐日記」　推喬親王と在原業平や紀有常らのここでの交友関係に「伊勢物語」に描写されてるが、親王が亡くなられて(897 年 54 歳)から 38 年後、讃岐の任期を終えた紀貫之が承平 5 年 (935) 2 月に京に向かうのに淀川を船で遡る時、「渚院跡」を遠望して次のように記している。「かくてふねひきのぼるになぎさの院といふところみつつゆく」として二首の歌を残している：

ちよへたる　まつにはあれど　いにしへの　こえのさむさは　かはらざりけり

きみこひて　よをふるやどの　むめのはな　むかしのかにぞ　なほにほひける

3・鶴橋　同市天之州町

鶴橋標識

「渚院跡」から府道 13 号線に沿って西南へ１ｋｍ行くと天の川に架かるこの橋に出る。

枚方から交野にかけての一帯は天空特に星に関する由緒ある所が多い。この橋の約４．7ｋｍ上流には「逢合い橋」というロマンチェックな橋が架かっている。

近くのたなばた姫（交野市倉治の機物神社）と牽牛星（枚方市中山寺）が年一度の逢瀬を楽しんだと伝えられるところである。

鶴橋は、中国の伝説で旧暦の 7 月 7 日の日に天の川上にできる橋の事でこの橋を織姫と彦星が出逢いをしたときれる所からこの橋で出会うと良縁に結ばれるといい伝えられている：

4・東見付　同市同素町

東見付跡

鵠橋の南側を堤防沿いに東へ100m程行くと写真の案内板がある。枚方宿の東端に位置し、江戸時代は天の川に長さ17間、幅3間一尺の橋が架かっていた。岡・岡新町両村が共同管理し、修繕、架け替えは幕府が負担した。参勤交代時には、紀伊徳川家は枚方宿に宿泊するが天の川渡河に際しては既設橋の上流に専用の橋を架けて渡ったという。

5・旧枚方有問屋役人邸　同市掃東町

旧枚方有問屋役人邸

東見付対面の旧京街道の東側に時代を帯びた家がある。江戸中期より、村年寄りと問屋役人を兼ね村の発展に尽くしてきた小野家の屋敷である。当家には正徳6年（1716）建築の古図と鬼瓦を有するが現在の建物は幕末と推定される。
本建物は街道に面して広い間口を有し、表口には揚見世と下げ戸が現存し、当時醤油屋を営んでいた町屋の遺構を残している。尚近年主屋改体のおり屋根裏から明治１８年６月の淀川洪水に軒先まで浸水し、ミイラとなった鮒が残されている。

6浄行寺　同市新町1－4－12

お寺に見えない浄行寺

本願寺（西本願寺派）派の古めかしい寺と思いがちだが、住職の希望で、寺のイメージでない寺という事で鉄筋コンクリート製の斬新な建物となっている。
寺の諸行事にも、お勤め、法事は当然であるがその間落語の寄席も開かれている。因みに、一昨年の8月25日には、笑福亭遊喬・同生喬が出ていた。

7・宗左の辻と枚方橋跡　同市大垣内

ひらかたはし標識

宗佐の辻標識

京阪枚方市駅から西に延びる道と旧枚方街道に当たる右角にこの碑がある。「宗左」の名は人の名であろうという説もあるがまだはっきりとはしていない。

この辻を東へとると饒速日命を祀る磐船神社に通じる磐船街道、西へそのまま淀川を渡れば摂津、播磨の国へ、途中で南へは大坂、紀州に通じる。

この辻は地理的にも分岐点であるが、江戸時代は水運の要淀の 30 石船が大坂八軒浜から京都伏見に向かう途中の中間点で船は一時ここで停泊した。乗客もここで買い物、物見遊参する者等この辺一帯は大変賑わった。その俗謡が残されている。

「送りましょうか、送られましようか、せめて宗左の辻までも」と枚方宿で一夜を楽しんだ人が遊女たちにここまで送られ、別れを惜しんだようである。

8・京街道と枚方有　岡帯締本町

京都・大阪への標識

枚方宿標識

宗左の辻を西へ 10m 程行くと岡本町公園の広場に出る。　サティビオルネの白亜のビルと京阪電車の　高架に囲まれた場所でビオルネ側に京街道と枚方宿の案内板と地図がある。それによると、枚方は、淀川に面して古くから陸運、水運との重要な要所で、中世末順興寺（願生坊）の寺内町として町つくりが始まった。

左の写真は枚方宿の中心

秀吉の時代は、淀川左岸に文禄堤が築かれ、家康時代にさらに整備され、今日の京街道の基となった。江戸時代には、この街道に伏見、淀、枚方、守口の四宿を設け、　枚方は岡新町、岡、三矢、泥町の四ヶ村が枚方宿に指定された。その中心がここ岡本町である。

9・常夜灯　同市岡本町

常夜灯

灯の東側に「妙見講常夜灯」の石柱が立っている。ここを境に東側を旧岡村、西を旧三矢村と分れた。この辺には、旧家がまだ残っているがよく見ると家の位置が道路の高さより 20cm 程下がっている。江戸時代参勤交代時に、紀州の殿様がここを通る時、道の整備に淀川の砂を敷いた名残だそうであ

10・くらわんかギャラリー　「塩熊商店」　同市三矢町 3－21

塩熊商店

枚方宿街道には、古い建物が多いがこの建物も古さを感じさせる。江戸時代から続いている京都と大阪を結ぶ京街道沿いにある建築資材、インテリア金物を営む塩熊商店である。塩熊は姓ではなく屋号で江戸時代から大正にかけて塩を商いしており、後をついた人が熊太郎、熊次郎、熊三郎といったように当主に熊の字がついたところから「塩熊」の名がうまれたようである。建物には、連子格子、虫籠窓等時代を感じさせる：

11・御茶屋御殿熾跡　同市岡甫町

御茶屋御殿標識

御茶屋御殿跡からの遠望

塩熊商店へ来た道を少し戻り、右に曲がり京阪電車の高架を潜ると石段の南側に意賀美神社北坂の石柱が立っている。この石段を 50m 程登ってくと西側にこの案内板がある。

豊臣秀吉は天正 13 年（1585）、当時枚方城主本多内膳政康の娘乙御前を近くに召し、本田氏の枚方城の西側、万年寺山の突端に御茶屋御殿を建て住まわせた。大坂平野から丹波、山城の山々を、

また眼下には淀川の船の往来も一望できる景韓地でありながら、軍事上の拠点の役割も果たせる所であった。後には徳川秀忠・家光も訪れている。

12・意賀美神社　同市岡見南町万年寺山

境内十三重塔

万年寺山の名は、枚方丘陵先端部に当たるこの他にあった万年寺に由来するという。万年寺の創建は 7 世紀初期に渡来僧恵灌が草庵を結び、平安前期の貞観 2 年（860）醍醐寺の聖宝上人によって開かれたという。幕末まで伽藍を誇り、朝夕鐘の音が宿場に響いたと伝わるが、明治 2 年の神仏分離令で廃れてしまった。寺宝と鐘楼は浄卒寺に移され、神社境内石段脇の十三重塔が僅かにその面影を残している。

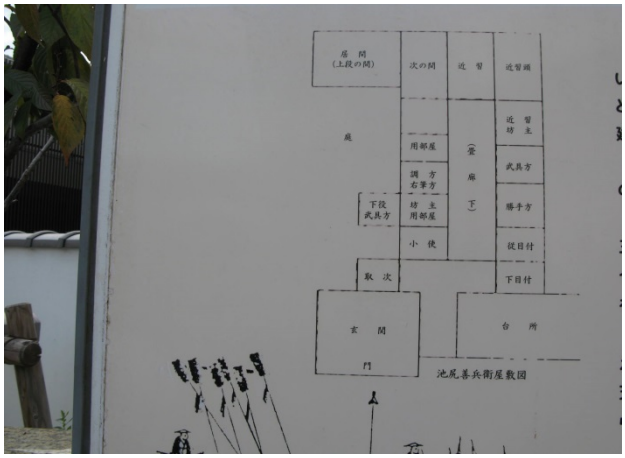
意賀美神社は、もとは伊加賀村宮山にあったが、明治 42 年（1909）に須賀神社・日吉神社を合祀して、須賀神社の旧座地であったこの地に遷座した、社殿には、珍しい和算の質問とその答えを額に描いて文久元年（1861）に奉納された「算額」があり、枚方市指定文化財になっている。また境内は、梅林で有名で梅を詠んだ俳句や短歌が刻まれた石碑があちこちにみられる。

この神社の東南方向に急峻な谷の崖縁に、樹齢 5～600 年、幹周り約 5m、高さ 30m 余りのムクの大木がある。

また境内北側に昭和 4 年 3 月、陸軍参謀本部が技術演習を行った際閑院宮熾仁親王が御覧になられた碑が御茶屋御殿跡の東側の高台にある。

13・枚方本陣跡　同市三矢町

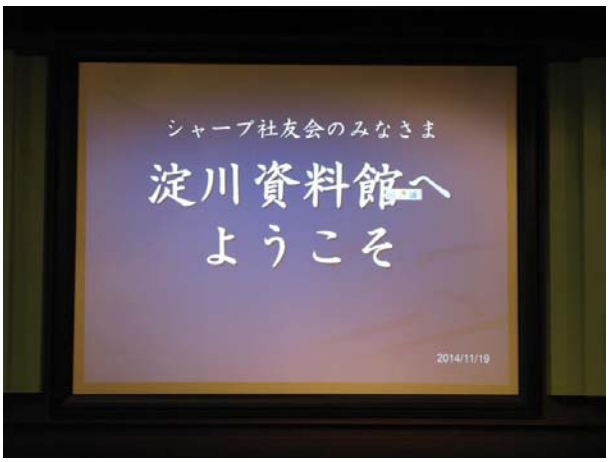
本陣跡



本陣見取り図

本陣は大名や公家のための宿泊施設であるが、枚方宿の本陣は問屋でもあった池尻善兵衛が当主を務めていた。間口 19 間、建坪 215 坪の立派な本陣があったが今は小公園と道を分けた淀川左岸水防組合事務所になつている。

14・淀川資料館　　岡市岡



歓迎

資料館内

枚方本陣跡から府道 13 号線を淀川側に渡って北へ 20m 程行くと川側にこの資料館がある。淀川資料館は明治 7 年（1874）の淀川近代河川改修百年を記念して開館されたものである。
古代から船運に利用された淀川の歴史や人々の水との関わり方、流域にゆかりの歴史、人物などを、古文書資料の展示、映像、パネルなどで紹介している。

大坂と京の伏見を結ぶ淀川筋は、古代より水運が発達し、船の往来も激しかった。近世になってそれらは過書船・伏見船と呼ばれ、このうち米を 30 石積める船を三十石船と呼んだ。「過書」とは船の通行手形のことで水上の関所を通行するときにこれを見せると関税が免除された。豊臣秀吉時代は、慶長 3 年（1598）に 30 石船と淀上荷船に御朱印を授けられ、淀川、木津川の支配を命じられたのが河村与右衛門と木村宗右衛門の二人で、これが淀川過書船の始まりとされる。船の種類は 20 石から 300 石まであり、徳川家康が慶長 8 年（1603）に改めて過書奉行を設置し、運上銀、運賃その他を規定して継承した。

●過書船は淀川筋では伏見船ともよばれ、幕府から許可を得た過書船に対抗し、元禄期（1700 年頃）に許可を得て営業権を競っている。同じ営業場所のため、しばしば紛争が起きるので享保 7 年（1722）に、新伏見船 200 隻が認められ、淀川、木津川を行き交う過書船・伏見船は千数百隻になったという。このうち 30 石船は、全長十五間、幅 2 間余り、船頭は 4 人で乗客定員は 28 人ぐらい、大坂と伏見間を上りは一日または一晩、下りは半日または半夜で上り、下りした。

朝便・夜便も枚方が休憩地点と成り、それを知って物売りの船が寄ってきて酒、食糧、食べ物とを商いした。
この物売りが、荒っぽい口調で「めしくらわんかい。酒のまんかい。サアサアみなおきなはれ。」「われもめしくふか。ソレくらへ。そっやのわろはどういじゃいやい。ひもじそふなツラしてけつかるが、銭ないかい」とい
つた口調で物売りに来る。

●三十石船といえば十返舎一九の「東海道中膝栗毛」が有名であるが、弥次さん喜多さんも船に同席していて物売りの口汚い物言えに「イヤこいつらアいわせておきやア、とほうもねヘヤつらだ。よこつらアはりとばすぞ」と息巻いたが乗り合わせた人に「コレコレおまい、腹たてさんすな。アリヤここのあきなひ船は、あないに、ものをぞんざいにいふのがめいぶつゃわいの」と諭される一説がある。これが「くらわんか船」として逆に淀川行く帰の名物船となった。

この時の値段は茶碗の数と大きさで決まるのであるが、いつの世でもふとどき者はいたようで売り子の目を盗んで茶碗を川に流していたようである。川工事の時に出てきたのが写真の茶碗である。

●「くらわんか船」の発祥は天正 10 年（1582）6 月 2 日未明に起きた織田信長が配下の明智光

秀に暗殺された「本能寺の変」が起きた時、家康は堺の町にいたが、信長と同盟を結んでいる家康は身の危険を感じ岡崎への婦りの道を急いだ。淀川から宇治川へ出るのにここの水運関係者は家康の脱出に惜しめない協力をした。
それがもとで家康と水運関係者に信頼関係が生まれ、摂津国下島群柱本村（現、高槻市柱本）で、大坂夏の陣の際に、高槻城から徳川の陣へ兵糧米 2 万石を運び込むのに、柱本村の茶船が昼夜を徹して淀川左岸へ輸送した功績により、家康から免税などの特権を授かったことに始まる。
　寛永 12 年（1635）に、柱本村の亀星源三郎が枚方船番所の御用を預かり、その後、亀屋を筆頭に枚方に移りはじめた茶船は、枚方茶船として幕府公認となり、幕末には地の利がよい枚方茶船が本家の柱本茶船を凌ぐ勢いになった。
ここでつかわれた「くらわんか船」の茶碗は、九州伊万里、唐津、四国砥部、摂津古曽部で焼かれたもので大量に作られた粗雑な雑器だが、素朴で質素な味わいがある。
●「治水翁碑」大橋房太郎は大阪市鶴見区に生まれた人で最初法律家を目指して勉学に励んだが、明治 18 年（1885）の淀川の大洪水で故郷が大被害を目の当たりにして、法律家を断念して、淀川の治水に一身をささげる決意をした人である。31 歳で大坂府会議員になった大橋は、何度も上京し、淀川改修の必要性を国に訴えた。その熱意が実り、明治 29 年（1896)、淀川を含む河川改修法案が国会で承認された。
　大橋は改修工事に必要な土地の地権者への説得、工事を安全に行う為の配慮等昼夜を問わず工事のために尽くした。そうした努力により、大正 12 年（1923）時の内務大臣後藤新平から「治水翁」の称号が贈られた。大橋は、昭和 10 年（1935）梅雨のさなか 76 歳で没するが死の直前まで「淀川は大丈夫か」と心配していたという。
淀川資料館 HP は http://www.yodo-museum.go.jp/
15・願生坊(がんしょうぼう)　同市枚方元町 6-81
淀川資料館を枚方街道に戻り、西南へ 200m 程行き、T 字路の道を左へ曲がり、京阪電車の踏切を渡ると間もなく右側にこの山門がある。浄土真宗の中興の担、蓮如上人の 13 男、実従が開基したもので、もともと枚方の宿場町は、願生坊の寺内町として中世期の未に形成された蓮如ゆかりの地である。山門を潜るとすぐ右に蓮如上人の立像がある。
16・台鏡寺　同市枚方元町
　当山の開基は元禄 9 年（1696）の「浄土宗寺院由緒書」によると、文禄元年（1592）に賢漣杜聖誉願生の開基による。
　願生上人は山城の生まれで、宇治平等院で剃髪、鎌倉光明寺で 10 教年修学し、天正の末に山城大念寺で住した後、河内国茨田郡枚方に台鏡寺を起こした。境内には地蔵尊石像が安置されており、「結線地蔵」として古くから攻方宿の遊女たちの参詣で賑わったという。
17・浄念寺

浄念寺

台鏡寺を後にしてまた踏切を西へ渡ると旧枚方街道に当たる、それを南へ 10m 程行くと
枡形の広場に出る。その北側にこの寺がある。寺の開基は、寺伝によると本願寺 8 世蓮如上人の河内地方巡化に同行した岩見入道浄念が明応 4 年（1495）に開創、元は現在よりも北東の川筋にあったという。

戦国時代の天文 4 年（1535）に「本願寺兼帯所」となり、特別な扱いを受け、江戸時代に入り、本願寺が東西に分かれた後は西本願寺に属し江戸中期の元文 4 年（1739）に、本願寺 15 世往如上人が浄念寺の注持を兼務することになり、「門跡御坊」となった。是より東にある願生坊の「東御坊」にたいし、「西御坊」と呼ばれた。現在地へは宝暦 13 年（1763）の火災により移った。
明治 13 年（1880）から同 21 年（1888）まで、堺県茨田、交野、讃良 3 郡連合の枚方郡役所がおかれた。

大坂夏の陣（1615）以降、徳川幕府は東海道を延長し、京より大阪までの間に伏見、淀、枚方、守口の 4 つの宿場を追加した。そのことより東海道は 53 次から 57 次となり、枚方は 56 番目の宿場町となった。
浄念寺の前は枡形の広場になっており、これは近くの枚方本陣の万一の場合に備えて兵器、兵士が集結出来る為であるという：
浄念寺本堂　本尊は阿弥陀仏、安阿彌の作で室町期の物と伝わる。建物は寛政 7 年（1795）に建てられており、寺の石垣が堤防の役割をしていた。
観音堂　万年寺山にあった万年寺が明治 2 年（1869）の神仏分離令で廃寺となり、本尊の観音像などを引き取りここに納めた。中には、観音像のほか不動明王像などが安置されている。この浄念寺の北側には枚方浜跡があり、近くには問屋場が軒を並べていた。
18・旧枚方宿木南邸跡　同市堤町

旧枚方宿木南邸跡

木南を合体すると楠となるがここの木南家も楠一族と考えられている。江戸時代初期から庄屋と問屋役人も兼ねていた。幕末には農業経営から金融業も営みこの他の有力者であった。また「くらわんか船」の茶船鑑札を所持し宿駅等も運営して村の運営に大きな影響を与えた。建物は、明治期と推定されるが、長い間口（10・５間）に出格子虫籠窓等を備えた伝統的な建物である。
広い敷地には、四棟の土蔵を持つ大規模な町屋で屋号を「田葉粉屋」と称した。
この建物の北川に画して「船番所」があった。当時は伏見船番所、過書船番所、船高札所が並び「くらわんか船」もここにつないでいた。
19・枚方宿鍵屋資料館　同市堤町

鍵屋資料館

江戸時代のガラス窓

江戸時代の町屋の特徴と典型的な船宿の構造を残す貴重な歴史的建造物として平成 9 年に枚方市文化財に指定された。
もともと枚方を代表する料理屋として「くらわんか料理」を営業していたが、平成 9 年に閉業した。その後枚方市が譲り受けて主屋は一部を修復保存、別館は資料館として改修され、主屋とともに平成 13 牢 7 月に「鍵屋資料館」して一般に公開されている。
鍵屋の歴史は古く、天正年間織田信長の時から創業したと言う老舗の船宿で現在の建物も江戸時代 18 世紀末頃のものとされる。主屋間口は 8 軒余り、街道に面して表側に格子戸、2 階には立派な定紋入りの宇建がある豪壮な民家である。
ここには歴史上の人物が何人もとおっている。文禄 4 年（1691）にオランダ商館長の江戸参府に同行した　医師ケンベル、永禄 8 年（1565）教師フロイスもここの事を紹介している。文政 9 年（1826）オランダ軍医シーボルトは、枚方宿の賑わいや、街には若い女性が大勢いることを楽しげに記すとともに淀川の河景色に故郷ドイツのマイン峡谷を思いダブらせて望郷の思いを綴っている。
鍵屋資料館の前の道を南へ 100m 程行くと枚方宿西見付跡に出る。

鍵屋資料館展示物写真は
http://kagiya.hirakata-kanko.org/floormap

鍵屋

20・枚方宿西見付跡　同市桜町
見付は、すぐ向こうに見えるところ、見張る所をさすことで近くには問屋役人の屋敷があった。東見付が東端とすれば、ここは西端に当たる。ここから京、江戸、東国に行く人、物の出入りの監視をしたことであろう。ここには、日本人ばかりではなく、外国人の旅行者も多く、先に何人かを記したが、その他申維翰、ツンベルク、アーネスト・サトウ等が来ている。ケンペル、シーボルトについては前記したがアーネスト・サトウもなかなかの日本通で幕末の混乱時に来日し英国公使館の書記官として日英双方に渡って活躍している。
アーネスト・サトウ（天保 14(1843)～昭和 4(1929)）は、イギリスの外交官・日本学者・薩道・佐藤愛之助などと名乗っている。文久 2 年（1862）9 月通訳見習いとして来日し、昭和 4 年（1929）に亡くなるまで外交官として前後 27 年間日本に滞在した。その間明治元年（1868）書記官になり、公使オールコックやパークスをよく助けた。
明治 28 年（1895）特命全権公使になっている。
著書でト「一外交官の見た明治維新」は名著である。
その他キリシタンや日本航海記などの著書もあり、多方面で日英文化交流に尽くした。

御茶屋御殿跡